旅行記としての「リップ・ヴァン・ウィンクル」

米　山　正　文

1．はじめに

ワシントン･アーヴィングの小品集『スケッチ･ブック』(*The Sketch Book of Geoffrey Crayon, Gent*., 1819-1820) 所収の「リップ・ヴァン・ウィンクル」(“Rip Van Winkle”、以下「リップ」と略) は、一般的に短編小説と見なされている。たとえば､『ケンブリッジ版アメリカ文学史』で、マイケル・デヴィット・ベルは、「リップ」と「スリーピー・ホロウの伝説」(“The Legend of Sleepy Hollow”) の二つは、当作に所収の「観光スケッチ (tourist-sketches)」とは異なる「短編小説 (short stories)」であると断じ、アーヴィングは「アメリカ的短編小説を発明したといってよいだろう」と述べている。アルフレッド・ベンディゼンも、この両作品はアメリカにおいて「短編小説」という新しい文学形式の開祖だと主張する。さらに、アーヴィング研究者ジェフリー・ルービン・ドースキーも、「リップ」は「完成された短編小説」になっていると述べる [1]。

しかし、こんにち「リップ」を独立した短編小説として読むと、読者は作品の最後で違和感をもつはずである。それまでは全知の語り手により、主に主人公の視点から物語が展開されるという、通常の小説によくある形式であったにも関わらず、最後になると、その物語が特定の土地の言い伝えにすぎないことが唐突に告げられる。「リップ」の語り手は、「いま私が語ってきた話」は、この話の主人公でもあるリップが旅人に語ってきた体験談であり、村の「その界隈では大人も子供もみな、その話を暗記していた」と述べるのである [2]。また、「リップ」には前書きがあるが、この物語を収めている『スケッチ・ブック』の語り手ジョフレイ・クレヨンは、「リップ」の語り手は、ニューヨーク州のオランダ系住民で伝説収集家ディードリッヒ・ニッカーボッカー (Diedrich Knickerbocker) であると断っている。つまり、クレヨンはニッカーボッカーが書いたものを自分の小品集にそのまま流用したということになる。そのニッカーボッカー自身は､直接｢リップ･ヴァン･ウィンクルと話したことがある」と､追記の「注」(NOTE) で述べているが、この物語をリップから直接聞いたのか、あるいは村人から伝説として聞いたのかは定かではない。(41) このように、土地の人々からニッカーボッカーへ、ニッカーボッカーからクレヨンへ、さらにクレヨンから読者へと、一つの言い伝えが幾重にも継承されている。最終的に読者は、人から人へと語り継がれる、村の伝説を聞いただけ､という結果になるのである。

こうした構造は、短編小説というより旅行記に近い。すなわち、語り手がある土地を訪問し、その土地の地理や歴史、珍しい話や面白い話を読者に紹介するという形式である。実際、「リップ」は風光明媚なキャツキル山脈の描写から始まっており、内容はその麓の村の住民にまつわる伝説なのである。

ルービン・ドースキーは「リップ」の従来の批評に対して、それを独立した作品として論じる主流の解釈に疑問を提示し、あくまで『スケッチ・ブック』の中の一編として持つ意味を追求すべきだという重要な指摘をしている [3]。そして､『スケッチ･ブック』自体が旅行記ではないと主張し､アーヴィングは現実のイングランドではなく、想像上のイングランドを創り上げたが、その基となっているのがイングランドの伝説や神話であると述べ、「リップ」と『スケッチ・ブック』には、歴史的連続性等を示すことができる､「物語の重要性」という共通のテーマがあると論じている。

この小論は、「リップ」を『スケッチ・ブック』の一編として読むべきだというルービン・ドースキー立場には同意したうえで､逆の方向から｢リッ

プ」に迫ることを目的とする。すなわち、「リップ」を小説（fiction）としてではなく旅行記として読むことを試みる。ルービン・ドースキーは『スケッチ・ブック』は「旅行スケッチ (travel sketch)」ではなく「フィクションとしてのスケッチ (fictional sketch)」だと述べ、アーヴィングの創作家・芸術家としての側面を強調する[4]。確かに『スケッチ・ブック』所収の英国紀行文は、アーヴィング自身の旅行体験に虚構が混ぜられている可能性は十分考えられる。しかし、その題目が示す通り、この作品集が旅行記として意図されていることは明白である。『スケッチ・ブック』冒頭の一編「自分自身についての語り」で、クレヨンは「当世の旅行者にとって鉛筆を持って旅に出かけ、折り畳みカバンを［景物の］スケッチで一杯にして帰ってくるのが流行となっている。同じように私も友人たちを楽しませるために、いくらかスケッチをこしらえてみようという気になった」と述べている。(9) つまり、クレヨンにとって、この作品集は、自分が旅して描いた、数々の景物の「スケッチ」なのである。実際、『スケッチ・ブック』に収められた 34 編のうち、少なくとも 25 編は明確な英国紀行文である。本稿はドースキーとは対照的に、こうした紀行文との類似点から、「リップ」の旅行記としての側面を強調する。

以下、まず「リップ」の冒頭部分における旅行記の特徴を確認し、次に主人公のリップ自身を「旅行者」と仮定して、『スケッチ・ブック』の中のクレヨンの英国紀行と比較しながら、物語の分析を行う。最終的に、重層的な旅行記としてのテクストの構造と、リップとクレヨンとの共通点を明らかにする。

2. 旅行案内のはじまり

「リップ」を旅行記と仮定し、この「小説」を再読してみると、物語の出だしが納得いくものとなる。語り手は「ハドソン川を船で旅 (voyage) したことのある人なら誰しも、キャツキル山脈のことを覚えているに違いない」という一文で物語を始める。(29) そして、キャツキル山脈がアパラチア山脈の支脈であることや、その地理的な広がり、季節や時間による色合いの変化、近隣の主婦たちにとって天候のバロメーターになっていることなどを語る。次の段落では、最初の「船で旅をしたことのある人」を受け、その「旅人 (voyager)」なら、その山脈の麓にある村から、らせん状に立ち上る緩やかな煙を目にしたことがあるかもしれない」と続け、その村はもともとオランダ人植民者によって開かれたという歴史を紹介し、今もいくつか残る、初期の移民たちの家の形状や外観を描写する。(29)　最後に、その村にかつて住んでいた人物としてリップを紹介し、リップにまつわる物語に入っていく。このように、物語は旅人の視点から入り、ハドソン川とキャツキル山脈、山脈のふもとの村が紹介され、最後にその村の伝説に移っていることが分かる。この導入方法は小説というより、旅行をする読者を想定した案内書に近いと言える[5]。

さらに、冒頭のキャツキル山脈の描写が、非常に視覚的で、多分に脚色されていることにも注目したい。山脈は「高貴な (noble) 高みまでせり上がり、あたり一帯に君臨している (lording)」という。季節や天気、一日の時間が変わるごとに、山脈の「魅惑的な (magical) 色合いや形状」にもいくらか変化が生じる。また、天気がいいとき、山脈は「青と紫」をまとい、「澄み切った夜空にくっきりとした輪郭を刻み付け」る。雲が眺望に入らないときは、「灰色の靄を頭巾のように頂きに集め」、その頂きは「日没の最後の光の中」で、「光り輝く冠 (crown of glory) のように、明るい光を放つ」という。(29) 青や紫、様々な色合い、空を背景とした山脈の輪郭は、視覚的・魅惑的な美を印象づける。また、高貴さ、辺りに君臨する高さ、冠や光輝のイメージは、キャツキル山脈を擬人化していると同時に、人がおよびもしない、神々しさや崇高さを付与している。こうした美 (beauty) と崇高さ (sublime) の演出は、18 世紀後半から 19 世紀初頭にかけての旅行記の常套形式をそのまま使っていると考えられる[6]。

実際、『スケッチ・ブック』の語り手クレヨン自身、アメリカにおける旅の魅力として、美や崇高さの享受を挙げている。「自分自身についての語り」でクレヨンは「私はいつも、新しい場所を訪れ、見知らぬ人物や風習を観察することが大好きであった。まだ幼い子供の頃から旅 (travels) を始め、生まれ育った都市の中の無縁な場所や未知

の地域へ、ひんぱんに発見の旅に出た」と述べ、生来の旅好きであることを吐露する。(8) そうした「ぶらつく (rambling) 性癖」は成長とともに増し、旅行記を読むことに熱中するようになった、読書は旅行好きの性癖を決定的なものにし、自分は母国アメリカの各地を回るようになったと述べる。そして、湖や山や谷、滝などアメリカの広大な自然景観を羅列した後で、「アメリカ人にとっては、自然景観の崇高さ (the sublime) や美しさ (the beautiful) を求めるのに、母国の外へ出る必要はまったくない」と締めくくっている。(8-9)「リップ」の冒頭のキャツキル山脈は、こうした、旅行者がアメリカにおいて求める自然景観を体現していると考えることができる。

「リップ」の語り手（ニッカーボッカー）はさらに、物語の舞台となる、オランダ系移民が入植したという古い歴史を持つ村（読者にとっては異国趣味をそそる舞台である）へと焦点を移すのであるが、ここでも魅惑的・視覚的な要素を見ることができる。キャツキル山脈は「魅惑的な (fairy) 山々」（妖精を想起させる）と神秘化され、その麓の「上方の青色の濃淡が近景 (nearer landscape) の新緑に溶け込むところ」に村があり、木々の間から「こけら板の屋根がチラチラと光っている」と語られる。(29) そして、初期の入植者の家がまだいくらか残っているが、それらはオランダから持ち込まれた「小さな黄色いレンガ」で建てられ、「格子窓と切妻造りの前面」を見せているという。(29) 青や緑や黄色といった色彩の強調や、遠景と近景との構図上の対比、さらに建物の細かな外観の様子など、読者に絵画を思わせるような、鮮明な視覚的イメージを与えている。これによって、山間の、大昔からあり、古い遺制を残しているオランダ系の村という、それだけで都市からの旅行者にとっては魅力的な土地を、さらに魅惑的な場所に仕立てているのである。

このオランダ系入植者の歴史の紹介は、「リップ」の後の部分との関係でも重要である。この後述べられていくリップの物語で最も重要な部分――リップがキャツキル山脈で 17 世紀オランダ植民地時代の人々の幽霊に出会うというくだり――に背景的知識を与えるものになっているからである。さらに、「リップ」の最後で、語り手はオランダ系の末裔の人々に言及し、「オランダ系住民の老人たち」はほぼ一様にみな、リップの話が本当だと言い、キャツキル山脈にまつわる幽霊の話を信じていると述べている。(41) つまり、「リップ」の最初では（旅行先の）背景的知識としてオランダ系植民の歴史を解説し、物語を語り終えた後、再びその村の人々に戻り、それが現在のオランダ系住民に伝承されている説話であったことを明かしている。こうして読者は、その物語がキャツキル山脈という魅力的な観光地に残る一伝説に過ぎなかったことを再確認する。この巧みな構成は「リップ」がもつ旅行記的性格をよく表している。

3. ジェントルマン・リップ

「リップ」の構成が旅行記と重なっているだけではない。その中で紹介される、土地の伝説の主人公もまた「旅人」となっている。

『スケッチ・ブック』が出版された当時、クレヨンの言う「折り畳みカバンをスケッチでいっぱいにした」「当世の旅行者」というのは、そのような時間的・経済的な余裕がある人々、つまり有閑階級の人々を指していた[7]。興味深いのは、リップの特徴がそのような人々のそれと似ていることである。リップは村の一介の農夫に過ぎないが、オランダ植民地時代という「騎士道的な (chivalrous)」時代に「勇壮な (gallant)」姿で登場するヴァン・ウィンクル家の末裔だと紹介される。「利益をもたらす労働 (labor)」は一切嫌い、長い「釣り竿」(rod)」で一日中釣りをしたり、「猟銃 (fowling piece)」を担いでリスや野バトを狩ったりする。自分の農地で働くことはないが、一方で、隣人の農作業や村の収穫の集まりでは積極的に手助けをしている。また、うるさく小言を言う妻から逃れるため、村の宿屋 (inn) に集まる「賢人や哲学者、他の暇な人々でできたクラブ (club)」に足しげく通っている。(29-31) 名家の末裔であることのみならず、労働をせず釣りや狩猟を楽しみ、広く村の人々を助け、「クラブ」に通うという特徴は、上層階級、とりわけ地主階級の生活様式を想起させる。

実際、リップには、『スケッチ・ブック』の他の作品（紀行文）で登場する英国の上層の人々

と共通点がある。たとえば、クレヨンが大陸旅行仲間のフランク・ブレイスブリッジ (Frank Bracebridge) の邸宅に滞在する数章のうちの 1 つ「クリスマス・イヴ」において、地方のジェントリー階級ブレイスブリッジ家の大廊下で、クレヨンは「甲冑をまとった戦士」の絵や、壁に掛けられた「猟銃 (fowling pieces) や釣り竿 (fishing rods)、その他の狩猟道具」を目にする。(163) 同じように、クレヨンがシェイクスピアゆかりの地を旅する「ストラトフォード・オン・エイヴォン」において、若き日のシェイクスピアと関わる大地主ルーシー家の広間で、その「大地主 (country gentleman)」の廊下に「狩猟の道具や戦利品」がかつて飾られていたと述べ、何代目かの当主の肖像画をみたクレヨンは、そのトーマス・ルーシー (Thomas Lucy) 卿の「狩猟、鷹狩、弓術の腕前」を想像する。(219-221) リップの祖先の「勇壮な戦士」像や、釣りと狩りの慣習は、こうした由緒ある大地主の描写と共通している。

ブレイスブリッジ家についていえば、他にも「リップ」との共通点がある。リップは村の子供たちに対し、「遊び (sports) の手伝いをし、・・・凧あげやビー玉遊びを教え、幽霊や魔女、インディアンついての話」を長々と語ってあげているが、ブレイスブリッジ家の当主（フランクの父親）も、古くからあるイングランドの遊び (games) が大好きで堅固に守ろうとしている。(30, 160-162) 実際に、使用人たちはクリスマス・イヴに伝統的な「遊び (sports)」にふけり、当主はクリスマスの日に若者たちの「遊び (sports)」（仮装舞踏会のこと）を大喜びで見物している。(162, 190) ブレイスブリッジ家にサイモン (Simon)・ブレイスブリッジという、リップとよく似た男性も登場する。(164) リップは子供たちの人気者であるばかりでなく、村の善良な主婦たちすべてに「大のお気に入り (great favorite)」であり、人の好い性質のため村では「あまねく人気 (universal popularity)」がある。(30) 同様に、一族の中でサイモンは、若者たちの「人気者 (idol)」で、おしゃべりで彼らを笑わせ、先述した仮装舞踏会の行列では先頭もきっている。(164, 189) 年配の人々にも「大のお気に入り (great favorite)」で、子供たちには「浮かれ騒ぎの達人」であり、行くところ「サイモン・ブレイスブリッジ氏ほど人気のある (popular) 存在はいなかった」とクレヨンは舌を巻いている。(165)

このように、リップの特徴は『スケッチ・ブック』に登場する地主階級の姿と奇妙に類似している。もちろん、実のところリップは小さな農地しか持たない一介の農夫であり、釣りや狩猟で農作業を怠けているだけの男であり、祖先の時代も「騎士道的」などと語り手にほら話的に誇張されているにすぎない。それゆえ、リップと大地主との類似は、読者の笑いを引き起こすバーレスクの効果を持ち、リップは滑稽にくずされた大地主の姿、つまり上層階級のパロディ (mock country gentleman) となっていることがわかる。しかし、当時の文脈に引き寄せれば、その疑似的な上流階級性がリップを、「旅行者」になる資格を持った人物に脚色していることは重要である。

4. 自然景観とリップ

「キャツキル山脈の最も高い場所の一つ」へ、リップが入り込んでいくことも、リップの「旅行」と解釈することができる。(32) 先に述べたように、『スケッチ・ブック』の語り手クレヨンは生来の旅好きで、「ぶらつく (rambling) 性癖」があり、実際に、ある秋の日にウェストミンスター寺院のあたりを「ぶらついた (rambling)」り（「ウェストミンスター寺院」）、ある夏の日には遺跡を求め「ぶらついて (ramble)」ロンドンまで行ったり（「ロンドンの古物」）している。(134, 192) 同様に、リップがキャツキル山脈に登っていくのは、ある秋の日の「長いぶらつき (ramble)」だったと語られている。(32) 好きな狩猟を一通り終えたリップは、断崖の木々の間から下界を眺めるが、その光景は以下のように描かれている。

> リップは遠方に、はるかはるか下方に、気高い (lordly) ハドソン川が、静かに、しかし、威厳ある姿で (majestic) 流れているのを目にした。川面には、紫色 (purple) の雲が映り、ゆっくりと進む小舟の帆が見えた。小舟はそこかしこでガラスのような胸［透明で輝く水面のこと］の上で眠っているようであった。ハドソン川は最後には青色 (blue) の高地 (highlands) へと姿を

消していった。(33)

ここで、ハドソン川は擬人化され、かつ気高い存在に脚色されている。また、色彩（雲の「紫」や高地の「青」、帆の「白」）の豊かさによって視覚的に美化されている。こうした描写は、物語冒頭での語り手によるキャツキル山脈の描写と非常によく似ている。普段から地元で狩猟をしているリップがこのように審美的に風景を鑑賞したとは考えにくい。ここでは、語り手が（その背後の作者アーヴィングが）リップの目を借りて、旅行者にとってのハドソン川の眺望の魅力を印象付けていると解釈できる。

さらに、リップは反対方向を眺めるが、それは以下のように描写されている。

> リップは目を落とし、峡谷 (glen) の一つを奥深く覗き込んだ。峡谷は荒涼とし (wild)、寂寞としていて (lonely)、ごつごつした表面をしていた (shagged)。谷底は、突き出した崖から砕け散った岩々で一杯であり、日没の反射光があってもほとんど光に照らされなかった。リップは横になったまましばらくその景色を見つめていたが、徐々に夕闇が迫り、山脈は長い青い影を山間に落とし始めたので、村に着くよりずっと前に暗くなってしまうだろうと思った・・・。(33)

先の描写と同じように、ここでも峡谷は擬人化されているが、ハドソン川の光景とまったく対照的である。荒々しさ、寂しさ、暗さは不気味な雰囲気を醸し出し、明らかにゴシック的である。実際、この直後に峡谷の方から、ヘンリー・ハドソン (Henry Hudson) 隊の一員の「幽霊」の声が聞こえる。いわば、幽霊話というゴシック話を導く、おあつらえ向きな舞台として機能している。

英国で国内旅行が盛んになった 18 世紀末から 19 世紀初頭にかけての時期に焦点を当て、旅行記を広範に研究したジェイムズ・バザードは、当時の旅行記には三つの系統があったことを指摘している。一つ目がケルト主義（スコットランド旅行の流行）、二つ目がゴシック小説の読書による「想像上の旅」（大陸ヨーロッパ旅行の代替）、三つ目が風景を絵画のように審美的に眺める「ピクチャレスク旅行」である[8]。ピクチャレスク旅行記の影響は、「リップ」冒頭の描写や先のハドソン川の景観の美化に見ることができる。そして、ケルト趣味やゴシック趣味は、峡谷の描写に反映されている。それは峡谷の不気味な雰囲気だけでなく、リップの眺望全体におけるスコットランドを連想させる言葉の使用、すなわちハドソン川の行先として“highlands”という言葉が使われたり、峡谷が“glen”と表現されたりしていることからも明らかである。語り手（その背後のアーヴィング）はここで、当時流行した旅行記の系統をすべて取り入れ、読者を楽しませようとしている。すなわち、ここでリップはただの農夫ではなく、キャツキル山脈という「ピクチャレスク」と「ゴシック」の両方を持ち、かつスコットランド旅行を連想させる場所への案内役となっているのである。

5. いにしえへの旅

ブレイスブリッジ邸で古い伝統的なクリスマスの過ごし方を詳細に語ることからも分かる通り、『スケッチ・ブック』の語り手クレヨンは、古物（古い建物から古い習俗、過去の歴史まで含む）愛好家である。それは「自分自身についての語り」で、旅によって「いにしえ (antiquity) を辿ってみたい」、また「過去の薄暗がりの栄華の中で我を忘れてみたい」という切望を公言し、「ロンドンの古物」で「私はいくらか古物探求家 (antiquity hunter) である」と自認していることからも明らかである。(9, 192) クレヨンの英国旅行は主に史跡巡りであり、史跡でない場合でも英国の伝統や古い慣習を求める過去への旅である。同じように、リップのキャツキル山脈への「旅」も、単純に美しい自然景観を求めるだけでなく、17 世紀オランダ植民地時代という「過去」への旅になっている。

たとえば、リップの旅とクレヨンのブレイスブリッジ邸訪問とを比較すると、両者の相似性がわかる。リップが最初に出会う「幽霊」男は、「昔のオランダ人風のいで立ちをしていた (His dress was of the antique Dutch fashion)」と述べられるが、クレヨンがブレイスブリッジ邸で最初に出会う使用人の女も「いで立ちは非常に昔風であった (dressed very much in the antique taste)」と述べられ

ている。(33, 160) また、先述したように、ブレイスブリッジ邸では、使用人や一族の若者、サイモンらが、伝統的な「遊び」(“game,”“sports,”“play,”“gambol,”“revel”など変奏をつけられている) にふけっているが (160-162, 177, 187, 189-191)、同じように「リップ」でも、リップが出会った一団が楽しんでいるのが「九柱戯 (ninepins)」という遊びである。(34) リップが近づくと、彼らはその「遊び (play)」を中断し、じっとリップを見つめるが、酒を飲むと、また「遊び (game)」に戻っていく。(34) 両者の間でただ異なるのは、楽しく浮かれ騒ぐブレイスブリッジ邸の人々と違い、キャツキル山脈の一団は「真面目腐った」顔をし、一言も話さずに、ただ黙々と遊びに興じているということである。(34) これは、後者が死者たち（幽霊）であることを暗示していると同時に、厳粛な顔つきで遊びに興じているという、馬鹿々々しい「ちぐはぐさ」で読者の笑いを狙っていると解釈できる。

また、リップが最初に出会う男の呼称も興味深い。この場面は、リップの視点を通して語られており、最初は「見知らぬ人 (stranger)」であったが、リップが荷物運びを手伝ってやる時には「新しく知り合った人 (new acquaintance)」となり、一緒に行先に向かう道中ではリップの「連れ (companion)」となって、最後に、仲間の一団に出会ったときは「案内人 (guide)」と呼ばれている。(33-34) これは、この男に対するリップの心理的距離が徐々に近くなっていったことを示しているが、最後の「案内人」という表現は、旅行地での案内人のイメージを喚起する。同じように、クレヨンも旅先で何度か案内人に頼っており、たとえばシェイクスピア所縁の地を訪ねる「イースト・チープのボアズ・ヘッド・タバーン」では、『ヘンリー四世』などに登場する実在の酒場の絵画を求め、聖ミカエル教会を訪れるが、そこの「教会堂管理人 (sexton)」が案内役をしてくれ、クレヨンは彼を「友人 (my friend)」と二度呼んでいる。(96, 99)

リップがハドソン隊の一団と出会う、「リップ」の核となる場面について、多くの批評が指摘しているように、ゴシック小説の先駆とみることはもちろん可能である[9]。先に述べた不気味な舞台設定の後の「幽霊」の登場という超自然的設定は、典型的なゴシック小説の特徴である。しかし、この一団との出会いについても、かつてその地に居た人々の様子を想像するという、旅行者の習性の一変奏に過ぎないと解釈することもできる。実は、クレヨンが旅先で、昔の人々を生々しく想像するという場面が『スケッチ・ブック』には繰り返し登場する。具体的には、ウィンザー城を訪れる「国王詩人」、「ウェストミンスター寺院」、テンプル騎士団の礼拝堂を訪れる「ロンドンの古物」、および「ストラトフォード・オン・エイヴォン」で、一つのパターンとなっている。たとえば、「ストラトフォード・オン・エイヴォン」では、ルーシー邸の広間で、若きシェイクスピアが鹿の密猟で捕らえられルーシー卿の前に引き出されるという光景を思い浮かべる。ルーシー卿が使用人たちに囲まれている様子やシェイクスピアが猟場管理人らに取り押さえられている様子、半開きの戸からのぞき込む女中たちの表情、ルーシー卿の娘たちが同情しながらその若者を見つめている様子を、空想の中で生々しく羅列している（「私は空想した」(I fancied) という表現を二度繰り返している）。さらに、その広間を去る時も、「広間と関連して想像した数々の場面や人物たちに完全に心を奪われてしまっていたので、自分が実際にそうした場面や人物の中にいるように思えた」と、空想が現実化したかのような錯覚に陥っている。(222)

また、歴史的建造物の中では、「幽霊」を見たような錯覚まで起こしている。たとえば、「ウェストミンスター寺院」で、寺院に入っていくとき、クレヨンは「大昔 (antiquity) の領域へ足を踏み入れ、過去の年代の暗がりの中で我を忘れるような」感じだったと述べる。そして、遠くの回廊に、黒い正服を着た年配の堂守の姿を見つけると、「近くの墓の一つから抜け出てきた幽霊 (spectre) のように見えた」と述べている。(134) また、「ロンドンの古物」で、クレヨンは「この建物が大昔はどのように使われていただろうという一種の夢想 (reverie)」に浸り、もともとは修道院であっただろうと思って、修道士が回廊に引きこもり書物に没頭する様子を想像する。こうした「物思い (musing) にふけって」いると、何人かの白髪頭の男性たちが姿を現すのを目にするが、その「黒い外套や古風な雰囲気」のため、「いま自分が思い

描いていた過ぎ去りし日々の幽霊 (ghosts) が・・・目の前を通り過ぎていくようであった」と述べている。(193-194) 両方とも、旅先で出会った年配の人々をやや矮小化し滑稽に描いているのは明らかだが、昔の人々の姿を空想するクレヨンが、彼らを、過去からよみがえった「幽霊」と錯覚するまでになっていることがわかる。

さらに、空想と絵画との関係も見逃せない。クレヨンの空想は、その場所で目にしたものや、その場所にまつわる伝説に基づいているが、絵画の影響もある。クレヨンが絵に注目するのは、「本づくりの技術」、「イースト･チープのボアズ･ヘッド･タバーン」、ブレイスブリッジ邸でのエピソードの一つ「クリスマス・ディナー」、そして「ロンドンの古物」である。この中で、絵が（あるいは絵の中の人物が）「現実化」するような場面が登場する。たとえば、「本づくりの技術」で、クレヨンは大英博物館の中のある図書室に潜り込む。そこで昔の作家たちの著作を書き写し、自分の著作に流用しようとする「現代」作家たちを見る。そして、うたた寝の中で、こうした現代作家が昔の作家の衣服を取り合う群衆に変貌し、壁に掛けられた像画の中から昔の作家たちが「どろぼう！」と叫んで飛び降りてくるという荒唐無稽な夢を見る。(63-65) また、「クリスマス・ディナー」では、先述したクリスマスの日の仮装舞踏会の場面で、様々な古き時代の衣装をまとったサイモンや若者たちを見るが、広間にあった「一族の古い肖像画が額縁から飛び出して、その舞踏会に加わったかのように見えた」と述べる。(190)

興味深いことに、「リップ」でも、リップがハドソン隊の一団に出会う場面で、絵画が登場する。九柱戯に没頭する彼らの姿を見て、リップは、村の牧師の家にあった絵画、すなわち、オランダ人が植民した時代に本国から持ってきた「古いフランダース地方の絵画の中の人物たち」を思い出す。(34) ここは、この一団がオランダ植民地時代の人々であることを匂わせる伏線になっているが、絵画を思い出したリップにとっては、絵の中の人物たちが目の前に現れたかのような感覚になっていると想像できる。

さらに、「仮装」という点でも、両者と「リップ」は共通している。「本づくりの技術」でクレヨンの夢の中では、群衆（現代作家）が昔の作家の衣服をはぎ取って身に着けてく様子が「仮装」(masquerade) と呼ばれている。(65) 同じように、「クリスマス・ディナー」でも、先述したように、サイモンらの遊びは「仮装（舞踏会）」(masquings) である。(190)「リップ」で、ハドソン隊の一団で特徴的なことは、服装や顔つきの描写が際立っていることである。特に服装については詳細に語られ、彼らは「古めかしい異国風の服装」で、「短いダブレットを着ている者もいれば、ジャーキンを着て革帯に剣を刺している者もいて」、ほとんどが、最初にリップが出会った男と似たような「ひざ丈ズボン」をはいていたなど細かく描写される。(34)「指揮官 (Commander)」らしき者についても、「紐締めのダブレット、短剣のついた幅の広い革帯、羽のついた高い冠帽、赤い長靴下、甲にロゼット飾りのついたヒールの高い靴」を身に着けていたと述べられる。(34) こうした、大昔の衣装の羅列は仮装行列のイメージを容易に喚起する。また、一団が九柱戯を楽しむ窪地は「小さな円形劇場 (amphitheatre) のよう」であったと述べられているが、この「円形劇場」の比喩は、まるでリップが、彼らの様子を見世物のごとく鑑賞しているイメージを喚起している。(34) このイメージは、先のクレヨンがブレイスブリッジ邸で、旅行者（よそ者）として異国の面白い「遊び」を見物している姿と共通している。このように、リップのキャツキル山脈での体験は、過去の人々のよみがえり、絵画の影響、仮装のイメージなど様々な点でクレヨンの古物めぐりと重なっているのである。

6. 外国人旅行者リップ

いにしえへの旅が終わり、リップは現代に戻ってくる。リップにとってはただ生まれ故郷に戻ってきただけ（正確には一晩だけ寝て自宅に帰ってくるだけ）であるが、戻ってきた世界は 20 年後で、イギリス（植民地）からアメリカ合衆国へと変わっている。つまり、イギリス人リップは、「外国」アメリカに入り込んできたことになる。それだけでなくリップは、自分が出会った 17 世紀オランダ植民地時代の「幽霊」と同じく、過去の時代からの「幽霊」（よみがえった死者）となって現代に姿を現すのである [10]。

興味深いのは、村への帰郷がキャツキル山脈への旅と重なっていることである。その証拠に、リップが合衆国に入り込む場面は、植民地時代の幽霊と出会う場面の繰り返しになっている。キャツキル山脈でリップが最初にハドソン隊の 1 人を見かけたとき、「見知らぬ (strange) 人物を見た」と語られる。そして、「さらに近づくと (approach)」、その「見知らぬ人 (stranger) の外見」の「異様さ (singularity)」にリップは驚くが、「衣服は古い時代のオランダ風であった (His dress was of the antique Dutch fashion)」と服装が注目される。(33)

一方、キャツキル山脈から故郷に戻ってきたリップは、「村に近づく (approached) につれ」、何人かの人々に出会うが、みな自分が知らない人なので驚く。そして、「彼らの衣服もまた、リップが慣れ親しんでいた様式とあまりにもかけ離れていた (Their dress too was of a different fashion from that to which he was accustomed to)」と述べられ、同じような言葉遣いで服装が注目されている。(36) さらに、村のすそに入り込むと、村は以前より大きくなり人の数も増え、見たこともない家々が立ち並び、「見知らぬ (strange) 名前」が戸口には掛かっており、「見知らぬ (strange) 顔」が家の窓に見え、リップにはすべてが「奇妙 (strange)」だった。(36) この“strange”の繰り返しは、ハドソン一隊との出会いの場面と呼応しており、他の言葉遣いの共通性と同様、両方の場面が同一パターンであることを示している。

また、リップがなじみの村の宿屋（「クラブ」が開かれていたところ）に行く場面も興味深い。独立後のアメリカの状況がまるで異国の人物によって描写されているような様相を呈している。かつての宿屋の代わりに建っていたのは「ユニオン・ホテル（主人ジョナサン・デューリトル）(The Union Hotel, by Jonathan Doolittle)」というホテルである。高い棒が立っており、その天辺から「星や縞の異様な (singular) 寄せ集めが描かれた旗がはためいていた」が、リップには「まったく奇妙で (strange) 理解できない」ものであった。さらに、ホテルの看板は、かつてあったジョージ国王の絵が「異様に (singularly)」変貌しており、「赤い外套は青と淡黄褐色のもの」に、手にあった「笏」は「剣」に変わり、「縁反帽」を冠った人物となっていて、その下には大きな字で「ワシントン将軍」と書かれていた。(37)「ユニオン」（連邦という意味）や「ジョナサン」（いわゆる「ヤンキー」を連想させる）、また、「旗」（星条旗）、「縁反帽を冠った人物」（初代大統領ワシントン）から、ここが合衆国であることは当時の読者には容易に想像がつく。だが主人公のリップには何が何だか分からないという、作者による dramatic irony の技法が読み取れる。しかし、ここで重要なのは、読者にとっては馴染みの習俗が、「外国人」の視点でもって滑稽に描かれていることである。

アーヴィングの他の著作を読んだことのある者なら、この場面とよく似たものを別の作品にも認めるはずである。『スケッチ・ブック』より以前に書かれた、アーヴィングの初期作品、雑誌『サルマガンディ』(*Salmagundi*, 1807-1808) である。第 3 号および第 5 号で、トリポリ出身の「マスタファ・ラバダブ・ケリ・カーン (Mustapha Rub-a-Dub Keli Khan)」なる架空の人物の、アメリカ滞在記が挿入されている。カーンはニューヨーク市で、クレヨンと同じく「ぶらつき歩き (rambles)」をし、見聞きしたことを本国の友人に手紙で送る[11]。また、アメリカという外国の「法律や政治についての説明」を今後の手紙で書くと述べているが (92)、これは 18 世紀旅行記の典型的な形式である[12]。第 3 号で、カーンは、この「帝国」が、最も権力のある“bashaw”（知事や軍司令官という意味）によって統治されていること、この bashaw は「大統領 (President)」という称号で呼ばれていることを告げる。そして、現在の bashaw は「ごく平凡な老紳士」で、「赤のひざ丈ズボンをはき、馬を杭にくくり付けたことで国民の感情を害し」「徐々に人気を失って」いると述べているが、大統領が滑稽に卑小化されていることが分かる。(92) また、第 5 号では、独立戦争終結時に英国軍がニューヨークから退去した 11 月 25 日を記念する式典が観察され、軍事パレードの様子が描かれる。砲兵隊が市役所まで行進し、市長から旗を手渡されるという儀式に過ぎないのだが、カーンは、砲兵隊が「城」（市役所のこと）を攻撃し、最後に敵である「最高位の知事 (grand bashaw)」を討ち取ろうとしていると解釈し、隊長と市長の儀礼的なやり取りが、言葉に

よる壮大な「戦闘 (battle)」であると語る。「大きな」bashaw が長い演説で「怒り狂った攻撃」をすると、「小さな」bashaw もひるまず応戦し、相手の議論を「賞賛すべき巧みさ」でかわすと、「三段論法」で「何度も突き刺し」、最後は知事が降伏して城の旗を明け渡すと描写する。(119) ただの言葉のやり取りが馬鹿々々しいほど大げさに描かれ、ニューヨーク市の儀礼が外国人の目を通して、卑小化され滑稽化されていることが分かる。ウィリアム・ヘッジスはカーンの記述には、オリヴァー・ゴールドスミス (Oliver Goldsmith) の架空の旅行記『世界市民』(*The Citizen of the World*, 1762) の影響があり、陳腐となった市の慣例が諷刺されていると指摘している[13]。こうしたカーンによるアメリカの「異化」は、リップの目による独立後のアメリカの「異化」と共通しており、旅行記の手法を使った諷刺となっているのである。

村に戻ったリップは結局、成長し家庭を持った娘の家に住むことになるが、「家ですることもなく」、以前と同じように、かつての宿屋、現在はホテルに通うようになる。(40) 社会学者ジョン・アーリは観光旅行の研究書の中で、旅行先とは「住宅や仕事場といった日常的な場所の外」でなければいけないと指摘しているが、キャツキル山脈へ入る前も、村に帰った後も、リップは一貫して「家」と「労働」から逃れるため外出している[14]。そして、ホテルの前の長いすに座り続けるリップは、「村の長老の 1 人」となり独立戦争前の「昔」を語る「年代記 (chronicle)」となる。(40)

興味深いことに、クレヨンのイギリス紀行でも同じような人物が登場している。イースト・チープを訪問した際、近隣の歴史に詳しいろうそく屋の寡婦に出会うが、クレヨンはこの人物のことを「この界隈で不可欠な歴史の語り部 (chronicler)」「尊敬すべき歴史の語り部 (chronicler)」と二度同じ言葉で称賛している。(93) また、ストラトフォード・オン・エイヴォンで、シェイクスピアの墓がある教会を訪れ、堂守とその友人から作家にまつわる数々の言い伝えを聞くが、同じように 2 人を「歴史の語り部 (chroniclers)」と呼んでいる。(212) 旅先で出会うこうした人々は現地の案内役となっているのだが、晩年のリップも同じような役割を担っている。ホテルにやってくる「あらゆる訪問客 (stranger)」に自分のキャツキル山脈での体験を語るようになる。(41) こうして旅人リップは最終的に、他の旅人にその土地の面白い伝説を語り聞かせる旅行案内人となって生涯を終えるのである。

7. おわりに

本稿の目的は、「リップ」の旅行記としての側面を明らかにすることであった。最初に、「リップ」の始まりと終わりに注目し、物語の舞台となる村の紹介に旅行者の視点が採用されていること、その舞台が観光熱をそそるような魅力的な場所に脚色されていることを論じた。また、物語の最後では村人の視点を使い、リップにまつわる物語が、その村の言い伝えに過ぎなかったことを読者に再確認させる構成となっていることを論じた。次に、旅行者を楽しませるような、その言い伝えの主人公リップ自身も旅行者となっていること、また読者には訪問地の旅行案内人となっていることを、主に『スケッチ・ブック』の語り手＝旅行者クレヨンの紀行文との共通点を挙げながら論じていった。まず、当時「旅行者」となれた有閑階級とリップとの奇妙で滑稽な類似性を指摘した。また、リップのキャツキル山脈での眺望には当時の旅行記の三つの系統がすべて凝縮されていることを述べた。さらに、クレヨンの旅とリップのそれとの一番の共通点である「過去への旅」を分析した。クレヨンの紀行文の最大の特徴は古物趣味であり、リップの 17 世紀オランダ植民地時代へのタイムスリップはその趣味を体現するものとなっている。クレヨンは過去の人物や事物を得意の空想によって再現しているのに対し、リップはそうしたものを「幽霊」として実際に体験している。案内役の存在、仮装を眺めるイメージ、絵画の現実化などの共通点からも、そうしたクレヨンとリップの呼応関係を実証した。

最後に、リップの帰郷も、アメリカという「異郷」への旅になっていると論じた。まず、リップの「アメリカ人」との出会いの様子が、先にオランダ植民地時代人との出会いのそれと重なっていることを指摘し、さらに、独立後のアメリカの様子が、リップという「外国人旅行者」の視点によって、滑稽に異化されていることを、『サルマガン

ディ』との類似性から指摘した。そして、リップの晩年について、クレヨンが旅先で出会った案内役と同じく、ホテルの前で旅人に村の歴史を語る「旅行案内人」になったと論じた。

「リップ」の最大の面白さは、語り手ニッカーボッカーが旅行で得た伝説であるというだけでなく、その伝説の主人公もまた旅行者であるという点であろう。その主人公自身が読者に対し、キャツキル山脈あたりの自然景観や歴史、伝説を、身をもって紹介する旅行案内人ともなっている。つまり旅行者（旅行案内人）リップの話を、旅行者（旅行案内人）ニッカーボッカーが紹介し、さらに、そのニッカーボッカーの話が旅行者（旅行案内人）クレヨンの『スケッチ・ブック』に収められている。すなわち、旅行記として三重の構成になっていることが興味深い。形式的にニッカーボッカーが間に入っているが、本稿でも明らかにしたリップとクレヨンとの共通性を考慮すると、リップはクレヨンの分身になっているのではないだろうか[15]。クレヨンが空想でしか体験できなかった世界、すなわち、過去の世界に入り込み、当時の事物や人物をじかに体験することを、リップが達成しているといえる。オランダ植民地時代に実在したハドソン探検隊の「幽霊」に出会い、荷物を一緒に持ってやり、案内された先で九柱戯を楽しみ酒を飲む様子を目の当たりにし、自分も酒を飲むことまでできているからである。リップはいわば、旅行者クレヨンの願望を体現する存在、つまり wish-fulfillment であると解釈できる。これはクレヨンの（そして作者アーヴィングの）夢の世界であり、その意味では、ルービン・ドースキーの主張するように「虚構 (fiction)」の世界であるということができよう。しかし、それは小説としての虚構ではなく、あくまで旅行者がいっとき抱くことのできる虚構の世界、旅行記で語られる一時の夢なのである。

---

[1] Bell, 20; Bendixen [2010], 3; Rubin-Dorsky [1986-1987], 234.「リップ」を短編小説とみなす例は枚挙にいとまがないが、他の例として、マイケル・コリンズは「リップ」はアメリカ文学における「最初の短編小説の一つ」であるうえ、おそらく「その中でも最も有名なもの」と述べている。Collins, 55. さらに、アーヴィング研究の碩学ウィリアム・ヘッジスも、「小説 (fiction)」と「スケッチ (sketch)」との違いに慎重でありながら、アーヴィングにそのような自意識はなかったとしても、「リップ」と「スリーピー・ホロウの伝説」は小説 (fiction) という形式になっていると認めている。Hedges, 145-146, 194.

[2] Irving [1978], 41. 以下、『スケッチ・ブック』からの引用はこの版により、ページ番号を末尾に括弧で示す。

[3] Rubin-Dorsky [1985], 393.

[4] Rubin-Dorsky [1986-1987], 217.

[5] リチャード・ガッサンは、キャツキル山脈への旅行者が 1823 年の手紙で「リップ」に言及していることを示し、「リップ」が当地への観光旅行熱を駆り立てていたことと指摘している。Gassan, 87.

[6] Andrews, 67-82; Batten, 29-31, 102-110; Buzzard, 45-47; Gassan, 53-57; Monk, 221-232; Towner, 314.

[7] Andrews, 73; Bailey, 19-21; Batten, 93-94; Gassan, 3-7.

[8] Buzard, 42-47.

[9] Bendixen [2017], 31-34; Bradley, vii, xvii.

[10] ハドソン隊の幽霊とリップとの間には奇妙な共通点がある。隊の全員が「あごひげ (beard)」を生やしていたと描かれているが、帰郷したリップも長い「あごひげ」を村人に注目されている。リップが最初に出会う酒担ぎ男も「白髪交じりのあごひげ (grizzled beard)」を生やしているが、同じように帰郷したリップも「白髪交じりのあごひげ」を生やしている。こうした共通点は、リップがハドソン隊の人々と同様、アメリカの村人にとっては幽霊になっていることの比喩的な暗示になっている。Irving [1978], 33-34, 36-37.

[11] Irving [1977], 91. 以下、『サルマガンディ』からの引用はこの版により、ページ番号を末尾に括弧で示す。

[12] Batten, 32, 84-91.

[13] Hedges, 54. パーシー・アダムスは、カーンの手紙の部分について、ナイーヴだが明敏な外国人観察者の利用は、18 世紀文学作品で最も人気のある手法の一つだったと指摘している。さらに、この手法は、作者が広範に旅行記を読んでおり、それを作品で模倣していることを示すと述べている。Adams, 115.

[14] Urry、3.

[15] ヘッジスは、「リップ」と「スリーピー・ホロウの伝説」の語り手はニッカーボッカーということになっているが、『スケッチ・ブック』の売り上げを考慮したアーヴィングが以前の作品で使ったこの人物を利用しようとしたのではないかと推定している。そして、両作品の語りにニッカーボッカーの口調はあまりなく、実際のところ、語り手はクレヨンであると、説得力のある解釈をしている。Hedges, 141.

引用文献

Adams, Percy G. *Travel Literature and the Evolution of the Novel*. Lexington: the University Press of Kentucky, 1983.

Bailey, Brigitte. *American Travel Literature, Gendered Aesthetics, and the Italian Tour, 1824-1862*. Edinburgh: Edinburgh University Press, 2018.

Batten, Charles L. *Pleasurable Instruction: Form and Convention in Eighteenth-Century Travel Literature*. Berkeley: University of California Press, 1978.

Bell, Michael Davitt. "Conditions of Literary Vocation." *The Cambridge History Of American Literature*. Vol.2. eds. Sacvan Bercovitch & Cyrus R. Patell, 9-123.

Bendixen, Alfred and James Nagel. eds. *A Companion to the American Short Story*. Chichester, West Sussex: Wiley-Blackwell, 2010.

Bendixen, Alfred. "The Emergence and Development of the American Short Story." *A Companion to the American Short Story*. eds. Alfred Bendixen and James Nagel, 3-19.

---. "Romanticism and the American Gothic." *The Cambridge Companion to American Gothic*. ed. Jeffrey Andrew Weinstock, 31-43.

Bercovitch, Sacvan & Cyrus R. Patell. eds. *The Cambridge History of American Literature*. Vol.2. New York: Cambridge University Press, 1995.

Bradley, Elizabeth L. "Introduction." *The Legend of Sleepy Hollow and Other Stories [The Sketch Book of Geoffrey Crayon, Gent.]* Washington Irving, vii-xx.

Buzard, James. "The Grand Tour and after (1660-1840)." *The Cambridge Companion To Travel Writing*. eds. Peter Hulme & Tim Youngs, 37-52.

Collins, Michael J. *The Drama of the American Short Story, 1800-1865*. Ann Arbor: University of Michigan Press, 2016.

Gassan, Richard H. *The Birth of American Tourism: New York, the Hudson Valley, and American Culture, 1790-1830*. Amherst: University of Massachusetts Press, 2008.

Hedges, William L. *Washington Irving: An American Study, 1802-1832*. Baltimore: the Johns Hopkins Press, 1965.

Hulme, Peter & Tim Youngs. *The Cambridge Companion to Travel Writing*. Cambridge: Cambridge University Press, 2002.

Irving, Washington. *The Legend of Sleepy Hollow and Other Stories [The Sketch Book of Geoffrey Crayon, Gent.]*. New York: Penguin Books, 2014.

---. *Letters of Jonathan Oldstyle, Gent. / Salmagundi; or the Whim-whams and Opinions of Launcelot Langstaff, Esq. & Others*. eds. Bruce I. Granger & Martha Hartzog. Boston: Twayne Publishers, 1977.

---. *The Sketch Book of Geoffrey Crayon, Gent*. ed. Haskell Springer. Boston: Twayne Publishers, 1978.

Monk, Samuel H. *The Sublime: A Study of Critical Theories in 18th-century England*. Ann Arbor: the University of Michigan Press, 1960.

Rubin-Dorsky, Jeffrey. "The Value of Storytelling: "Rip Van Winkle" and "The Legend of Sleepy Hollow" in the Context of *The Sketch Book." Modern Philology*. 82. 4 (1985): 393-406.

---. "Washington Irving and the Genesis of the Fictional Sketch." *Early American Literature*. 21: 3 (1986-1987), 226-247.

Towner, John. "The Grand Tour: A Key Phrase in the History of Tourism." *Annals of Tourism Research*. 12. 3 (1985): 2976-333.

Urry, John. *The Tourist Gaze: Leisure and Travel in Contemporary Societies*. London: Sage, 1990.

Weinstock, Jeffrey Andrew. ed. *The Cambridge Companion to American Gothic*. Cambridge: Cambridge University Press, 2017.

謝辞

本論文の英文概要の作成に際し、宇都宮大学基盤教育センターの Rory Banwell 准教授と Josh Kidd 准教授に有益な助言を頂いた。御礼申し上げる。

“Rip Van Winkle” as Travel Writing

YONEYAMA Masafumi

Abstract

Washington Irving’s “Rip Van Winkle,” included in his *The Sketch Book* (1819-1820), is widely regarded as one of the first American short stories. This paper attempts to explore how the story can be seen as travel writing rather than short fiction. First, this paper maintains that “Rip Van Winkle” begins and ends from a traveler’s point of view. Second, it states that Rip, the protagonist, plays a role of a traveler around the Kaatskill Mountains. It examines how Rip’s visit to the mountains exhibits the characteristics of travel writing of the late 18th and early 19th centuries. This genre is noted for a focus on the picturesque, the ancient, the Gothic, and the Celtic. In order to do this, this paper compares “Rip Van Winkle” with Geoffrey Crayon’s travel sketches of England in *The Sketch Book*, such as “Westminster Abbey,” “The Christmas Dinner,” and “Stratford-on-Avon.” Ultimately, this paper shows how “Rip Van Winkle” serves as one of the travelogues in *The Sketch Book* and how the traveler Rip achieves the wish-fulfillment of the traveler-narrator Crayon.

（2023 年 9 月 28 日受理）